

2014.7.25 茨城県大会決勝戦

藤代	502	010	202	12
霞ヶ浦	001	000	200	3

(藤) 竹内、山崎誠一古谷
(霞) 上野、安高、綾部一山田、佐野
[本] 浜渡 (藤)

2012年秋から6季連続で決勝に進出した霞ヶ浦。藤代には秋の準々決勝でコールド勝ちを取っており、下馬評では「霞ヶ浦有利」との声が多かった。ところが初回、エース左腕の上野拓真が5失点。「上野が序盤に大量失点するというのは、練習試合で2回くらいしかなかった。想定外のことです。選手たちが浮き足立っていました」と高橋監督。次の1点を取れば反撃ムードに転じられると考えていたが、3回表に2ランを被弾。流れを変えられず、3対12の大敗を喫した。高橋監督は言う。「結局、選手たちを追い込み切れなかったのかなど。上野にしても、連投したときに結果が残らないという課題があって、決勝までの6試合すべてを投げ切れる体力と精神力を身につけさせようと考えた。その一方で、上野を休ませても戦えるだけの2番手を作ろうとも思っていた。でも、どちらも確立できませんでした。夏を迎え、最終的には球数を100球以内に抑えつつ上野に投げさせていくことにしましたが、もっと厳しさを伝えて心を成長させていかなければならなかったと反省しています」

が成功しているながら、試合ではまったくスタートを切れない選手もいます。また、出塁したら外野手の守備位置を確認するのは走者の鉄則ですが、それを何となく流れでやってしまっている選手も少なくない。守備位置が深いのか、浅いのか。右中間や左中間は広いのか、狭いのか。そういうものを頭に入れ、外野手の動きをイメージしておけば、打球が飛んだ瞬間にある程度は判断できるものです。自分が動きながら打球を見て、パッとスタートを切れる選手なのか。それとも、打球が落ちたのを確認してから慌ててスタートを切る選手なのか。そういう視点で各選手の能力を見極め、県南大会に向けてメンバーをある程度絞り込んでいくというのが最初の作業ですね。

実戦形式というのは、最大の応用だと思えます。ウチの場合はまず応用から入っていき、「この部分が足りないよね」「ここはもっとこうしたほうがいいんじゃないか」と伝えていくスタイル。正直、最初から難しいものを求めているので、選手たちも大変だと感じているかもしれません。ただ、できていない部分が結果として表れたほうが、選手としても納得しやすいんじゃないかと。

また、新チーム結成時というのは皆がやる気になっている時期です。ですから、メンバー選考と同時に、全員にチャンスを与えることも大切にしています。今年の1、2年生は選手51名ですが、8月3日から3日間は全員が同じ宿舎で寝泊まりするようにしました。そして、Aチーム25名とBチーム26名がそれぞれ練習試合を行い、宿舎に帰ってきたら選手を数名入れ替えて、ある程度メンバーの振り分けをしました。勝負の厳しさを教えるのであれば、一定の実力を基準として、そこに達しない選手をパッサリ切ることも必要なものかもしれません。でも私としては、夏の直前などを除けば、できる限り全員を鍛え上げていきたい。だから、今でもAチームかBチームに関わらず、全員で同じ練習をしています。そこはウチの甘さであり、ウチの良さでもあると思っています。

結果重視ではなく “意図”を持つこと

選手たちにはよく「2年秋にメンバーを外れることは、1年秋にメンバーを外れることの数十倍厳しいんだぞ」と伝えています。毎年、夏へ向けてチームを完成に近づけていく

中で、春になれば期待の1年生も入ってくる。1年秋ならまだ1年後にチャンスがありますが、2年秋から3年夏までに巻き返すというのは、相当な努力が必要です。

チーム力を上げるためには当然、メンバーを外れた選手に対するフォローも大事になります。ウチには幸い、私以外にも指導スタッフがいるのでとても助かっています。ただ、最も重要なのはやはり選手の気持ち。一度落ちてから這い上がっていくだけの精神力がなければ、技術不足をカバーすることはできない。最近は気持ちの強さを持った子が少なくなってきたので、ミーティングなどで時間をかけてそういう話をするようにしていますね。そして努力の痕が感じられる選手については、言葉を掛けたり、公式戦でベンチ入りさせたりと、何かしらの形で認めるようにしています。

メンバー選考の基準ですが、結果は重視しません。夏場の暑さの中であえて間隔を空けずに追い込んでいくわけですから、体のキレが不十分なのは仕方ない。それよりも、野球の考え方が大事だと思っています。打撃で言えば、振るべきときにスイングしているか。狙うべき球を打とうとしているか。自分が好きな球をただ漠然と打っている選手と、しっかりテーマを持って打席に入っている選手では、その差は歴然です。

もちろん、投手の場合も同じ。「この打者は打ち気がない。甘くてもいいからストライク先行でいこう」とか、「このチームはガンガン振ってくるけど、監督に『ストライク先行で行け』と言われていたからストライクゾーンに投げて勝負しよう」など、しっかり意図を持って投げていなければならないと思うんです。疲労や技術的な未熟さによって、思いどおりにいかないこともたくさんあるでしょう。でも、明確な意図を持っていけば伝わってくるものがあるし、終わってからそこを練習して次につなげれば良い。いかに選手が意図を持っ

投手の育成ポイント

「立ち」「剥がし」「受け」

高橋監督が考える投球フォームのポイントは3つ。1つ目の「立ち」は、足を上げたときの姿勢。軸足でバランスよく立てているかどうか。2つ目の「剥がし」は、体重移動で“割れ”の状態を作ったときのこと。投げる方向へ前肩が向かっていくが、そこでグッと肩甲骨を剥がすように出せるかどうか。そして3つ目の「受け」は、最後のフィ

ニッシュ。右投手であれば左側にカベを作って、前足の股関節でしっかりエネルギーを受けることが大切になる。そこに全体重を乗せることができれば、腕が十分に走って前でリリースすることができ、より力強い球が生み出される。

受け

剥がし

立ち



て取り組めるか。その部分はものすごく重視していますね。ただし、パワーが一級品だとか、しっかり守れるとか、そういう選手は代打や守備固めなどのスペシャリストになる可能性もある。ですから、当然ながら個々の能力もしっかり見極めます。

あとは、やはり人間性。生まれ持った性格もそうですが、授業態度はどうなのか。日常生活でどんな立ち居振る舞いをしているのか。野球部員がグラウンドでしっかりしているのは当たり前のことであって、グラウンド以外のところにこそ、選手の本物の姿がある。他の先生たちに可愛がられていたりすれば、それは人柄が認められているということだと思うし、選手には「運がすべて味方してくれてもおかしくないような取り組みをしよう」と伝えています。

伸びていく選手というのは、そうした人間力を持ち合わせていると思います。例えば体づくり一つを取っても、食べることも練習だという考えで臨んでいるかどうかで、成果は大きく変わってくるもの。同じ百数十円を使うとして、果汁100%のオレンジジュースや牛乳を飲むのか、

それとも甘い炭酸飲料を飲んでしまうのか。そのちょっとした意識の積み重ねが大事なんだと。

それと、自分にとってプラスになること、マイナスになることを見極め、うまく取捨選択できるかどうか。さらに、必要なものを素直に吸収しようという気持ちがあるかどうか。これもまた、欠かせない要素です。単純に真面目で向上心があればいいというわけではなく、何でもかんでも言われたことを吸収してしまい、結果的に伸び悩んでしまう選手も少なくない。そういう部分の感覚を少しでも身につけさせるために、「いろいろな人、いろいろなことに興味を持って生活しなさい」とはよく言っていますね。

「あと一步」を超える ために必要なこと

私が霞ヶ浦に赴任したのは1982年ですが、野球部の監督就任は2001年春。それまでの19年間は男子バレーボール部を指導していました。チーム作りという意味ではどのスポーツも同じだと思いますし、当時の経験は今もすごく生きていま

す。バレーボールに関してはまったくの素人でしたが、だからこそ、素人でも分かるようなレベルで奥深くまで上手に伝えようとしてきた。どういうふうに言えば選手に伝わり、理解してもらえるか。その部分を勉強させていただきました。

そして強く感じさせられたのは、人に教えることというのは、同時に自分が勉強することなんだということ。また、すべてにおいて徹底力が大事だということです。時間を守るとか、あいさつや返事をするといったようなことは徹底してきましたし、普段の生活に乱れが感じられれば、いくらうまくても試合には使わない。実際、県大会決勝の前日にそういう行動をした選手がいて、勝つ可能性が低くなることを承知で起用しなかったこともあります。

その想いは今もずっと続いています。野球部の監督だからと言って、野球だけを教えていけばいいわけではない。勝つことよりもまず、選手を人として育てていくこと。それが私の指導におけるこだわりです。

逆にバレー部時代から変わったことと言えば、野球の技術や戦略・戦